

# 大学スポーツにおけるキャプテンの役割と在り方とは ～高知工科大学の強化指定競技に着目して～

1190492 竹下 竜平

高知工科大学経済・マネジメント学群

## はじめに

近年、日本ではスポーツに注目が集まっている。この注目は2019年からの2021年にかけて開催されるラグビーW杯、東京オリンピック、パラリンピックなどの大型スポーツイベントの開催に伴うものだ。これらの影響は大きく、この大型イベントにピークを合わせるべく、2015年10月にはスポーツ庁が設置され、スポーツに対する仕組みが整備されてきた。

その中でも注目されているものの一つに大学スポーツがある。大学スポーツの推進に関する事柄は、スポーツ庁設置以来、「大学スポーツに関する検討会議」の設置や、「日本再興戦略2016」における大学スポーツ振興に向けた国内体制(大学横断的かつ競技横断的統括組織：日本版NCAA)構築の明記、「大学スポーツの振興に関する検討会議タスクフォース」の設置など、急激に進められている(文部科学省 2017)。

大学スポーツは正課・課外活動にかかわらず、学生が豊かで健康的な生活を送るとともに、人間性や主体性、リーダーシップなどを身に着けるための素養教育として重要な役割を担っている。例えば、早稲田大学では早稲田スポーツ体現者として必要な知識とスキルの中に1. スポーツと人間形成、2. スポーツマンシップ、3. リーダーシップ、4. 目標設定と行動計画、5. ストレスマネジメント、6. チームマネジメント、7. 学生アスリートのメンタルヘルスが挙げられている(早稲田大学競技スポーツセンター『早稲田アスリートプログラム 大学でスポーツをするということ』)。

また、2017年3月に公表された「大学スポーツの振興に関する検討会議最終とりまとめ～大学スポーツの価値の向上に向けて～」では「競技力向上のキャリア面で重要な時期であると同時に、将来社会で活躍する上で必要なスキルを身につけ、人間形成を図るうえでも重要な時期」と位置づけ、学修上の配慮やキャリア形成支援が

重要であるとしている(文部科学省 2017)。このように大学スポーツには大学生アスリートに競技的にも人間的にもさらなる成長を促すための時期であると位置付けられているのだ。

その中でも私は、大学スポーツのキャプテンの役割に着目した。自分を成長させるために重要な時期である大学スポーツであるが、その分部活動の部員(フォロワー)を束ねる立場であるキャプテンの役割は大変大きいと考えているからだ。私自身、小学生から大学生までの12年間ソフトテニスをしてきた。その中で、ソフトテニスを通して体力やソフトテニスの技能はもちろんのこと、礼儀やマナーなど、様々な意味で学ぶことが多々あった。そしてキャプテンを務めたこともあり、そこでの学びも多かったが、反面チームをまとめるために自分の人格やチームの運営などで悩むことも少なくなかった。なぜ、これまでに研究されてきたキャプテンやリーダーとしての論文や著書が多く存在する中で、それでもなお、チーム運営に苦勞するのか疑問に感じた。その疑問の中で、私は大学スポーツには高等学校の部活動やプロスポーツと大きく違う点があるのではないかと考えた。もし、私が大学スポーツにおけるキャプテンの在り方をより早い時期からもっていたならば、よりチームを良い方向に導けたかもしれないという思いが強くなった。それゆえ、本論では大学スポーツのキャプテンの在り方を検討したい。そして本研究がこれから大学スポーツのキャプテンになる人たちにとって一つの指標になればと考えている。

以下、第一章では一般的なキャプテン像、大学スポーツの特徴を提示した上で、大学キャプテンはどのような役割を担っているのかを考察する。そして、第二章では高知工科大学の強化指定競技に着目し、一章で考察したことを落とし込み、どのようなことを意識してチーム運営していくべきなのかを明らかにする。

## 第一章 大学スポーツに求められるキャプテン像

### 第一節 一般的に言われるキャプテン像とは

キャプテンというのは周知されている通り、集団を統括する立場の人物のことであり、同じメンバーという立場でありながらコーチの指導体制、メンバーの人間関係を考慮した上でチームがより良い方向に機能するようにすることが求められている役割である。つまり、メンバーの中でも尊敬され、チームに対して責任を負う存在であり、かつ監督とフォロワーの仲介役としてチームを運営していく存在であると言える。そのために必要なキャプテンの資質とはなんなのか。先行研究である『スポーツにおける理想のリーダーシップならびにリーダー像』（2015 錦内大智）やヒアリング調査などからまとめると、1. フォロワーや監督からの信頼を得られる人間、2. 一生懸命さ（努力）、3. 目的を持っていることが挙げられる。

はじめに、1. フォロワーや監督からの信頼を得られる人間とは、端的にいえば尊敬される存在である。尊敬される存在であれば、フォロワーもキャプテンの発言を真摯に受け止め、理解し、行動してくれる。近年のスポーツで多く見られ、ニュースでもよく取り上げられているパワハラ問題も、この信頼される関係づくり、尊敬される自分を作ることができていないが故に起こりうる現象であると推測できる。では、どうやって信頼を築くのか。それが 2. 一生懸命さが関係してくる。

2. 一生懸命に自分の役割を全うすること、泥臭くチームのために動くこと、フォロワーから意見を聞き出すために一生懸命コミュニケーションを取ろうとすることなど、いろいろなことに対して一生懸命に取り組むことでフォロワーから尊敬の念が生まれ、それが信頼に変化していくのである。その中でキャプテンは自分が動いているから偉いといばるのではなく、謙虚にひたむきに取り組まなければ、一生懸命さは感じることはできない。つまり、重要なのは客観的に見た一生懸命さなのである。周囲がみて一生懸命と評価されることで、初めて尊敬の念を持ち、そこに信頼が生まれる。この意味で 1 と 2 は非常に関連性が強い。そして客観的に見た一生懸命さを身につけるためには何が必要か。それが 3. 目的を持つことである。

3. 目的を持っているということは、自分、または自分たちの現状を把握した上で、何が必要なかを考えているということである。

つまり、根拠を持っているということだ。根拠なしにチームを運営したとしても、行き当たりバッタリで毎回成果を上げることができないチームにはならない。確かにたまたま成果を上げることもあることは否定できない。しかし、なぜ勝つたのか、次も勝つためには何をしなければならないのかを明確にできなければ次も勝てるという保証はなくなってしまう。その意味でキャプテンは目的・目標を明確にし、部活動に取り組むことができるようにフォロワーに示しておく必要がある。ひいては、その目的に向かって自主的に取り組むことが、客観的に見た一生懸命さにつながる。

しかし、ここで疑問が生じる。それは選手としての実力は必要なのかということだ。確かに素晴らしい世界で活躍するトップチームには”スーパースター”がキャプテンを務めているケースもあった。例えば、NBA で活躍し、「バスケの神様」と言われたマイケル・ジョーダンや、NY ヤンキースで主将として活躍したデレク・ジーターなどがいる。これらのように”スーパースター”のように実力がなければ、キャプテンとして機能を発揮することはできないのだろうか。

### 第二節 キャプテンに実力は必要なのか

キャプテンに実力がどうかに関して、『常勝キャプテンの法則 スポーツに学ぶ最強リーダー』（サム・ウォーカー 近藤隆文訳）の実験結果をあげておこう。2010 年、テキサス州の大学 2 校から集まった教育者がクイズ実験を行った。以下は実験内容である。

●対象：学生 101 人

●実験内容：読書課題を元にしたクイズ

●実験の流れ

- ① クイズに個別回答
- ② 5～7 のグループに分かれる
- ③ クイズの回答について相談、回答
- ④ 回答の間違いを確認後、訂正の機会を与えられる

この実験結果から、成績の低かったチームと高かったチームの特徴が分かった。成績の悪かったチームの共通点は、グループのメンバーの中で学力に大きな差があったことである。つまり、グループの中にいわゆる”スーパースター”が存在していた。この実験の中で研究者たちは「スーパースターの地位がグループの他のメンバーに比べて高ければ高いほど、チーム全体の成績は低くなる」と導

き出している。そして、「スーパースターがひとりチームにいることが有益なのは、他のメンバーも比較的高得点を挙げる場合にかぎられる」とも示している。逆に成績の良かったチームは学力にあまり差がない平均以上の成績の学生が集まっていた。

これはなぜなのか。それはグループ討論にある。学力の差が大きかったチームはスター選手が会話の主導権を握っており、他の学生の意見が取り入れられていなかった。逆に、成績の良かったチームは議論がより徹底的に行われる傾向があり、全員に発言権があった。そして、回答はたいがい全員一致で正解を選ぶことができていた。

この実験結果から、確かにキャプテンには実力は必要である。しかし、“スーパースター”というほどの実力が必ず必要という訳ではなく、平均以上の実力があり、一節で挙げた3つの項目を満たしていればキャプテンとしての資質は備わっているとと言える。

### 第三節 大学スポーツの特異性

2017年3月に公表された「大学スポーツの検討会議最終とりまとめ～大学スポーツの価値の向上に向けて～」では、学生アスリートにとっての大学時代を「競技力向上のキャリア面で重要な時期であると同時に、将来社会で活躍するうえで必要なスキルを身につけ、人間形成を図るうえでも重要な時期」と位置づけ、学修上の配慮やキャリア形成支援が重要であるとしている。しかし同時に、「大学の関与が限定的であることから、学生アスリートの学業環境や就職への支援が十分になされてない」、また、「一部の学生においては、運動部活動に偏重するあまり、学業成績の低下や卒業要件を満たさない者もあり、学業環境の整備が求められる」と現状の課題について述べている（文部科学省 2017）。

ここで、大学スポーツの特徴をさらに詳しくするべく、高校の部活動と比較してみた。そして、高知県高校体育連盟事務局長である田中尚幸先生（高知県立高知丸の内高等学校教員）に話を伺った。その中で、高校も大学も教育の一連の中の流れであるという言葉があがった。それを前提に踏まえた上で、高校の部活動と大学のスポーツは目的が違っているということに着目したい。「高校の部活動は学習指導要領に基づいた教育の一貫であるということが目的であり、競技力向上といったものはその後についてくる。一方大学のスポーツは、主体性を求める課外活動であり、自分たちで競技力向上に向けて練習したり、サークルとして楽しんだりと自主的に運営

していくことが目的である。この観点で大学と高校とは重きを置いている部分が違っている。」このことから高校の部活は教育の一貫であること、大学スポーツは自主性、主体性を求められていることが分かった。

また、教育の流れということについては「高校と大学は完全に別のものでなく、それぞれが成長段階であるからこそ求められているステージが違い、特徴が生まれている。」と語ってくれた。このことから、高校と大学を完全に別として考えるのではなく、成長段階の観点からみて主体性と自主性を身につける時期であり、それらを作るためには自分たちの活動が「楽しむこと」なのか、「社会人としての基盤を作ること」なのか、「競技力の向上」なのか、などの目的を明確に作っておくことが重要であると考えられる。

以上のことから、大学部活動の特徴は1. 主体性をもつこと、2. 自主性を高めること、3. 目的設定能力を身につけることの3つが挙げられる。

第一章では大学スポーツにおけるキャプテン像を紹介してきた。まとめると、チームをより良い方向に導くために自ら学び、考え、一生懸命に努力する。その中でフォロワーとコミュニケーションをとり、信頼関係を築き、目的と目標を明確にする。これらを踏まえた上で次の第二章では私の最も身近な高知工科大学の強化指定競技のキャプテンの学生に当てはめて、どのような現状にあるのかということに着目し、論じていく。

## 第二章 高知工科大学の協議指定競技の現状調査

### 第一節 スポーツ推薦入試の背景と現状

高知工科大学の特別推薦制度いわゆるスポーツ推薦入試に加え、A0入試にはどのような背景や目的があり、開始されたのかは『学生アスリートにおけるキャリア教育の一考察～高知工科大学のアスリート教育の在り方とは～』（濱崎羅奈 2016）に明記されている。以下はその説明である。特別推薦制度（スポーツ推薦入試）は大学入試センター試験への参加、自己アピール、スポーツ活動、課外活動等を評価するというものであり、学生の多様化を目的として2009年から始まった。

追うようにして導入された入試制度が、マネジメント学部での2013年度開始のA0入試である。内容としては数理マネジメントブ

プログラム、国際マネジメントプログラム、スポーツマネジメントプログラムの3つから成り立っており、マネジメント学部が唱える「さまざまな分野におけるマネジメント能力を有する人材を育成する」という目標を具現化する意味でもあった。これは大学の入試制度における新たな一歩でもあるものである。スポーツマネジメントプログラムについては大学のスポーツ活動で高度な成績を修めつつ、マネジメントの専門意識を習得することで、スポーツビジネスの分野で求められるマネジメントスキルを身につけることを学ぶ意義、将来の展望としている。さらに学生に求める人物像としては大学スポーツ分野で高度な業績を修めつつ、マネジメントの専門知識を活かして、将来スポーツマネジメント領域で活躍しようとする文武両道を旨としている者である（本学パンフレットおよびA0入試「学生募集要項」）。

以上のようなことが、高知工科大学がスポーツ推薦制度としてA0入試を取り入れている背景と目的である。また、河合塾が調べた国公立大学A0入試結果一覧表（河合塾の大学入試情報サイトKei-Net）の中では学科名にスポーツと名の付くものはあるものの（北海道教育大学 芸術・芸術・スポーツビジネス、広島大学 生涯・健康スポーツ系、鹿屋体育大学 スポーツ総合）、方式名に具体的にスポーツと明記されている大学は高知工科大学以外にはなく、スポーツを通してマネジメント能力を発揮するに加え、技術的にも高いものを追及していることがわかる。

現在強化指定競技に選ばれている運動部活動は、硬式野球部、剣道部、ソフトテニス部、ソフトボール部、卓球部、バレーボール部男子、バレーボール部女子の7競技である。なお、剣道部、ソフトテニス部、卓球部にも男女は存在するが、バレーボール部のように別々というわけではなく、男女通して受験という形で入試を行っている。この部活動に所属している学生アスリートはある意味高校生の時からスポーツである程度の成績を残してきた“精鋭”であり、部活動でのそれ相応の結果と学業との両立が求められている立場にある。これらを踏まえた上で、現在、高知工科大学の強化指定競技に選ばれている運動部活動の結果はどのようになっているのか。7競技それぞれの分野で選ばれた“精鋭”たちが四国、西日本、あるいは全国の舞台上でチームの中心メンバーとしてどれほどの成績を挙げているのだろうか。以下は7競技の直近3年の部活動におけ

る学生の大きな大会の結果をまとめたものである。また、競技の特徴として、剣道、ソフトテニス、卓球には個人戦が存在するが、他の競技との差異がわかりづらくなるため団体戦の結果のみを一覧表に記載する。また、卓球部に関しては西日本の大会に団体戦が存在しないため、個人戦の最高成績を記載する。

図1. 高知工科大学強化指定競技結果一覧表

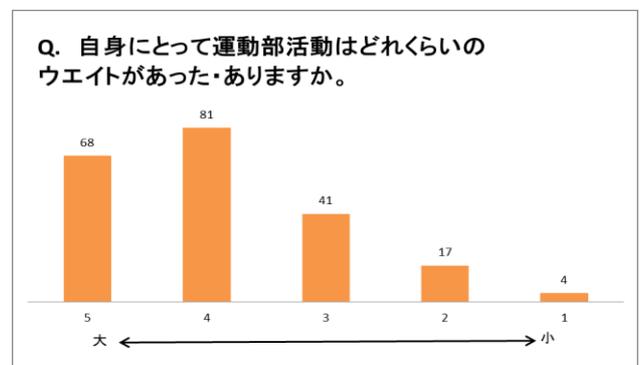
大会結果表（2016～2018の最高成績）					
部活動名	四国	中四国	西日本	全国公	全日本
硬式野球	優勝	リーグ3位	なし	なし	なし
剣道	ベスト4	予選敗退	ベスト8	なし	なし
ソフトテニス	優勝	優勝	ベスト8	なし	ベスト16
ソフトボール	優勝	なし	2回戦敗退	なし	ベスト16
卓球男子	優勝	なし	個人：ベスト16	優勝	ベスト16
卓球女子	優勝	なし	個人：ベスト4	優勝	ベスト16
バレー男子	優勝	ベスト4	ベスト16	なし	1回戦敗退
バレー女子	準優勝	ベスト16	1回戦敗退	なし	1回戦敗退

以上の結果から、四国内ではベスト4以上の成績ほどの競技もコンスタントに達成できているものの、西日本や全日本規模の大会では上位進出する事が難しく、個人戦でのベスト4進出はあるものの、団体ではベスト16の壁を超えることはできていない状態である。また、全国国公立大会では優勝という成績を収めているものの、私立大学が参加する大会では成績が残せていないことから、「国公立の中では強いが、全国の全大学単位でみると中堅の大学」というのが妥当なところだろう。

前提として、前述している通り高知工科大学はスポーツの成績を残すことを重視しているのではなく、文武両道を目的としている。

ここで濱崎（2016）が調査した「高知工科大学のスポーツ学生が感じているスポーツへの時間的・体力的ウエイト」のアンケート調査の結果を見てみよう。以下がそのグラフである。

図2. 高知工科大学生のスポーツの比重



以上の結果から、スポーツ学生はスポーツに対する意識は非常に強いことがわかる。つまり強化指定競技として全力で部活動に励ん

でいる以上、結果を追い求めるのは当然の欲求なのである。この欲求があった上で本学が求める文武両道を促すためには、スポーツとマネジメントの手法を結びつける意識づくりをし、マネジメントの様々な手法を学び実践することによって結果がついてくるというサイクルを作る必要がある。ひいてはそれが文武両道につながるはずだ。四国では成績が残せても全国で勝てないという状況を打破することが出来れば、その中に必ず今までと違う取り組みが現れるはずである。その取り組みこそがマネジメントであり、キャプテンはそれが実践できる重要な役職である。第二節では強化指定競技のキャプテンにヒアリング調査し、そこから一章で行った分析を当てはめて考察していく。

## 第二節 ヒアリング調査

今回調査した結果を踏まえ、部活動でどのような取り組みを行っているのか探るべく、7競技中2競技のキャプテン2名にヒアリング調査を行った。以下は実際のヒアリング内容とその回答である。

質問 1. 「チームとして明確な目的・目標を持っていたか、それをフォロワーと共有していたか」

A 「持っていたし、共有もしていた。もっと言えば自分が部活動をするにあたっての目的と目標も持っていた。」

B 「目標は持っていたが、目的は持っていなかった。目標は共有していた。」

質問 2. 「キャプテンとして何が重要だと感じたか」

A 「客観視ができること、チームに私情を挟まず、一生懸命に泥臭く行動すること。自分の前のキャプテンの時代は結果主義で、結果が出せる人は何をしてもいいという方針だった。それはスポーツをする本質ではないと考え、実力があっても真面目にしない人たちは試合に出さないなどした。」

B 「自分の意見だけでなく、周りの意見も聞いて進めること。独りよがりにならないこと。」

質問 3. 「フォロワーとはコミュニケーションをとっていたか」

A 「フォロワーに紙を配って文句、不満などなんでもいいから描いてもらい、フォロワーの本音を聞く工夫をした。また、そこで出た自分に対しての不満は受け止め、自分も改善するから一緒に頑張ろうと約束していた。コミュニケーションはとっていたと自分は感じる。」

B 「一日の練習後だったり、定期的が集まったりする時間を設けて意見だしのためのミーティングは積極的に行ってきた。そこで出た意見を元に練習内容や取り組みを考えていたため、コミュニケーションをとる機会は多かったと感じる。」

以上のようなヒアリング結果だった。ここで私は、この両方の部活動のキャプテンが話したことがフォロワーに認識されていなければならぬと感じた。なぜならば、企業でも経営理念と方針が共有されていなければ円滑に事業が進まないのと同じで、部活動でも目的・目標が共有されていなければ円滑に進まないと考えたからだ。そこで、各キャプテンが所属している部活動のフォロワーにもヒアリング調査を行った。A 氏のフォロワーは A①、B 氏のフォロワーは B①とさせてもらう。

質問 1. 「キャプテンは明確な目標を提示していたか」

A① 「目標も目的も提示していた。」

B① 「目標は提示していたが、具体的な目的は提示されていなかった。」

質問 2. 「キャプテンはどういう存在であったか」

A① 「チームの中でも目標が違っているのは当然だが、それらを統一してくれる存在だった。」

B① 「客観的にチームを支えてくれる存在。また、プレー面でもチームを引っ張る存在。」

質問 3. 「キャプテンはフォロワーとコミュニケーションを積極的にとっていたか」

A① 「全員に配慮ができている訳ではないが、コミュニケーションを取ろうとしている姿勢はあった。」

B① 「全員と仲が良く、コミュニケーション自体はあったが、チームに関するコミュニケーションはレギュラーメンバーとすることが多く、チーム内で活躍している人を中心に意見を聞くことが多かった。」

以上のようなヒアリング結果だった。この二つのヒアリング結果から、キャプテン自身が言う自分がしてきたことと、フォロワーから見たキャプテンがしていたことには、全く違うということはないが、違っている部分もあるということがわかる。つまり、自分がやっていることとそれに対する客観的な意見は違いがあるということだ。だからこそ、まずはこの違いを埋めることができなければ、

いくら一章でまとめたことを実践したと言ったとしても、それは自分の中での自己満足で終わってしまう。その差異をなくすためにフォロワーと様々なコミュニケーションをとって、自分が考えていることを浸透させていく必要があるのではないかと。そうして浸透させた結果、信頼を築くことができ、風通しの良いチームになり円滑にチームが運営できるようになる。そのために、キャプテン自身がフォロワー目線に立ち、自分を客観的に見るのが重要だ。

そのことを踏まえた上で、キャプテンは強化指定競技としてスポーツをする意味というものを明確にする必要がある。なぜなら、その運動部に所属している学生一人一人が高知工科大学のスポーツ部門の「顔」であるからだ。スポーツ学生には文武両道が求められているからこそ、勉強もスポーツもある一定以上の結果が求められている。その意味でスポーツ学生に大学側から課される責任はある意味一般学生よりも重い。しかし、それをデメリットではなく、メリットにするためにキャプテンは、ただ漫然と部活動に取り組み、結果を求めるだけではなく、部活動ひいてはスポーツをする目的を設定し、結果以上に財産になるものを作る必要がある。

### 第三節 問題提起

ここまで調査から考えられる高知工科大学の強化指定競技のキャプテンの問題点が二つ挙げられる。

1、スポーツをする目的が曖昧になっているケースがあり、ただ漫然と部活動に励んでいる状態になっている。

→スポーツ選手としてスポーツで生活できる人が少ない現代の状況の中で、スポーツがスポーツ以外のところで役に立つことは多く存在するはずである。そのために目標以外に目的を持ってスポーツに励むことが重要である。しかし、キャプテンが目的を持っていない以上、フォロワーに目的を持たせて部活動に励ませることは不可能に近い。キャプテンがスポーツに対して目的を持って行動するのはもはや必須なのではないか。

2、自分がやったこと、してきたこととフォロワーが見たキャプテンがしてきたことに差異が生じている。

→自分自信を客観視する能力が足りないために起きてしまう現象なのではないか。キャプテンとして自分なりに色々経験してきたとしても、それを客観的に見たときに評価するのは自分ではなく、他人であることを理解しておくことが重要なのではないかと。

これらを踏まえた上で、本学としての特徴を活かしながら、改善するためにはどうすべきなのかを第三章では論じていく。

## 第三章 本学に求められるキャプテン像とは

### 第一節 求められる行動

私が本研究で高知工科大学の強化指定競技のキャプテンが取り組むべき課題は以下の3つの内容である。

#### (1) 部活動に目的付けをすること

まず、スポーツに自らの学生時代の大部分を費やして生活しているからこそ、キャプテンがそのスポーツを通して得られる行動、心構え、考え方などの目的をフォロワーに示し、共有することである。

スポーツに励む以上、結果を追い求めるために目標を設定することはもちろん大事であるが、目標を達成した後、自分たちがどのように変化し、どのように成長したのかということを明確にすることができる方が、結果よりもはるかに重要なことである。そのために、自分たちがこの活動を通して何を身に付けたいのかという目的を明確に示し、フォロワーと度々共有しておくことが重要だ。例えば、「社会に出て必要な最低限のマナーと礼儀を身につける」であったり、「自分で考え、自分で動き、その責任を自分で取る意識づくりを作る」であったりと、追い求める目的はそれぞれ違うにせよ、明確に設定することによってイメージが湧いてくるはずである。そのイメージに自分たちがどう近づくのかを考え、行動させるためにも目的設定をする必要がある。さらに言えば、一つ一つの行動に目的や意味づけをすることができれば、さらに視野も広がり、自身の成長にもつながるはずである。つまり、全ての行動に目的・意味を持たせて行動することが一番重要である。

#### (2) 自分を客観的に見つめる能力

次に、ヒアリング調査からわかった「自分を客観的に見ることができる能力」が必要になってくる。

いくら自分自身が文献を読んで実践したと言ったり、努力をしていると言ったりしても、それが客観的に見てそうでなければその努力は認められない。その意味でスポーツは残酷なものなのである。自分がやってきたことを評価するのはあくまで自分ではな

く、他人である。だからこそ、自分を客観視するためにコミュニケーションをとり、フォロワーとの距離感を保つことも重要である。そうすることでチームに結束力が生まれ、キャプテンがチームの潤滑油として機能するようになるのではないか。客観視するためにはどうすれば良いのかを一生懸命に考え、いろんなことを勉強し、学習していくことが重要である。

### (3) 学習していく姿勢とある程度の実績

客観視ができるようになった上で、キャプテンにはある程度の実力も求められる。ある程度の実力ができた上で、さらに現状をよくするためにはどうすればいいのかを考え、実践していくという学習していく姿勢が必要である。

なぜなら、キャプテンはあくまで立場上キャプテンをしているというだけであり、尊敬される存在ではあるものの、神格化されるべき存在ではないからだ。尊敬というのは、一生懸命に動いている姿や、コミュニケーションをとろうとする姿を見たフォロワーからのキャプテンに対する一種の結果である。しかし、神格化というのは努力からくるものではなく、その人が威厳を保つために自分を上に見せているということに過ぎない。故に、キャプテンは一生懸命に動くことが前提として求められる。しかし、いくら一生懸命に動いていたとしてもその行動に結果が伴っていなければ無駄なことであるという評価に繋がってしまいかねない。つまり、キャプテンは一生懸命に動くことで、その結果として自分も実力をある程度伸ばしていくと信頼や尊敬を築くことができるようになる。そのためにはまずは自分ができるところを考え、行動し、反省し、改善するというPDCAサイクルを回していくべきだ。

### (4) 部活動は本学での講義の実践の場であること

以上の3つがキャプテンの基盤となるものである。この基盤があった上で、本学がどのような学生を求めているのかを今一度考える。それは文武両道ということだ。そして本学の特徴として、マネジメントの講義が多く存在している。この特徴を最大限に活かすということは、本学で学ぶことができるチームのマネジメントの方法や意見だしの手法などを学習し、実践することだ。そしてその実践の場こそ部活動だ。企業と部活動のマネジメントはそれぞれ違う部分はあれども必ず共通点がある。つまり、部活動を運営する上で企業の運営から学ぶことができることは数

多く存在するということだ。そうして得た知識を実践することが可能な役職こそがキャプテンである。だからこそ、キャプテンは本学で学ぶことのできるマネジメントを必死に学習し、それを部活動で実践することが重要である。そうして懸命に取り組むことで、前述した3つのキャプテンとしての基盤が達成され、最終的に本学に求められている真の文武両道につながるだろう。

## 第二節 本学におけるキャプテン教育

これまでに考察してきたキャプテンの意識づくりをするにあたり、高知工科大学全体でこの問題を解決する取り組みをしていく必要がある。なぜなら、スポーツ学生として入学させている大学側にも責任があるはずだからだ。そのために提案したい内容が以下の内容である。

### (1) 講義面でのアプローチ

現在強化指定競技に選定されている学生を対象にし、スポーツに関する授業を必修化させ、4年間を通してスポーツをするための目的付けをすることを学生自らができるようにする体制が必要なのではないだろうか。スポーツ学生として入学させているにも関わらず、入学後は一般学生と同じ内容の授業や履修科目しか選ぶことができない現状は、スポーツ一辺倒の学生を作り出す一つの要因になってしまうのではないか。もちろん、これはスポーツ学生を最優先しろということではなく、スポーツ学生であるからこそ、一般学生よりも責任が伴った行動が必要になるという考えの元の一意見である。

そこで私が提案したい具体的な講義内容は、スポーツ学生を対象に、スポーツ学生が定期的集まるある意味で部活型の授業である。スポーツ学生はスポーツをするために入学してきたという側面が強い。その意味で他のスポーツに触れ合ったり、自分と違う部活動の学生と意見交換したりすることで、より学生生活を豊かにすることができるはずである。しかし、楽しいことばかりしていても学習は得られない。そのために例えば、週4回の講義がある中で、1週目はスポーツ、2、3週目は意見交換と講義、4週目にスポーツなどスポーツと講義を織り交ぜる授業を作る。その中で課題提出や期限として守らなければならないものなどを作り、それが期日までに守れなかった学生はスポーツに参加することができないといった制度体制を作ることで自然と課題提出をさ

せることにつながると考える。そして、講義の内容も一般的な聞いて学ぶ受け身の授業ではなく、スポーツすることでどのようなことを得られるのか、スポーツ学生に求められていることはなんなのか、自分たちが求めている姿はなんなのかを自ら考え、発表するといった「自分がスポーツをする目的を考えさせる」講義を作るべきである。その中で、さらに深く追及し、意見交換の場を作るために、意見に対して批判をさせないように工夫する必要もある。スポーツをしている以上、自分が考えていることをアウトプットできる能力は必要な能力である。そのために、スポーツ学生が楽しみにできるかつ、学習することができるような講義を作ることが重要なのではないかと考える。

以上で挙げた講義を実現させるかは別の話ではあるが、スポーツ学生担当に任せるのではなく、スポーツ学生を活かすために本学が一丸となってスポーツを盛り上げる工夫と努力ができれば、スポーツ学生が主体的に部活動を行うことができるのではないかと考える。それができれば、第三章一節で述べた意識づくりにつながるのではないかと考える。そして、キャプテンだけではなく、キャプテンが持っている意識をフォロワーも持つことができれば、チーム運営はさらに良くなるのではないかと考える。

## (2) 定期的なインタビュー調査

次に、大学自体でもっとスポーツ学生に対してインタビュー調査を行うことを提案する。その中でキャプテンがインタビューに対して対応したり、そのシーズンでの注目選手などをピックアップしたりすることでスポーツ活動を活発化できるのではないかと考える。この取り組みはインタビューをすることが本質ではなく、自分の考えや部活動の目的、目標を公言するというビジョンを持たせるという役割でインタビューが効果的なのではないかと考える。

スポーツが盛んな私立大学では、体育会系の部活動の広告や活躍を掲載した新聞部が存在している。そこで大会結果を随時更新したり、重要な大会の前にインタビューを行ったりとスポーツ活動を全面にアピールする工夫がなされている。本学も国公立大学でありながら、強化指定競技が存在するほどスポーツに力を入れており、第二章第一節からもわかるように、四国レベルでは活躍している部活動ばかりである。その中で、中四国、西日本、全国

へ向けて日々どのような活動をし、目的を持ち、目標をどこにしているのかをキャプテンが公言することは、自分たちが目指している部活動の形を明白にすることにもつながる。だからこそ、本学のパンフレットに積極的にスポーツ活動を記載することも重要であり、またそれだけではなく、自分たちの部活動が日々どのような意識でどのように取り組んでいるのかを発信していく広報の役職を設置し、広報と大学側が一緒にスポーツを発信していくことが重要であると考えられる。

## 第三節 まとめ

本研究の結論を以下のようにまとめる。大学スポーツのキャプテンとはチームをより良い方向に導くために自ら学び、考え、一生懸命に努力する。その中でフォロワーとコミュニケーションをとり、信頼関係を築き、目的と目標を明確にする。このことを踏まえた上で、高知工科大学の強化指定競技におけるキャプテンが意識すべき点は以下の三点である。

### ①部活動の目的づけ

→「勝つ」というものを追い求めた先に得られる能力・行動

### ②自信を客観的に見つめる能力

→自分の考えていることとフォロワーが考えていることの差異をできるだけなくすように行動

### ③チーム内でのある程度の実力と懸命に努力する姿勢

→努力した結果のある程度の実力であると示すことが好ましい

### ④本学の特徴であるマネジメントの授業を学習し、部活動に落とし込んで実践して行くこと

→これが①、②、③の基盤を作り、本学に求められる真の文武両道を達成する要因である

そしてこの四点の意識を養い、強めるために本学がアプローチできることは以下の二点である。

### ①部活動型講義の開講

→スポーツと講義を織り交ぜ、提出期限を守らないとスポーツには参加できないといった工夫が必要

### ②定期的なインタビュー活動

→大学側のスポーツに対するより強い意識づけとキャプテンの部活雨に対する目的・目標の公言の場作成

### ③部活動での広報の役職設置と大学ホームページとの連携

→本学のスポーツを盛り上げ、発信していくための活動

この三点を行うことによって、キャプテンが自分の発言に対して責任を持つことができるようになるきっかけになると考える。また、キャプテンが目的・目標を公言する機会を作ること、自然と目的意識を持ってスポーツに取り組む意識づくりを作ることができると思う。

## おわりに

私自身、部活動をする上で「応援される人間」になる、チームとしては「日本一応援されるチームになる」ことを目的として部活動に励んできた。それは全国大会に出場した時、どんなに実力があって強いチームだったとしても、「応援したくない」と思うチームをいくつも見てきたことがきっかけだ。強くてもそう思わせるチームは、果たして勝つ以上のことを見出せているのか、スポーツは勝つ以上のことを学ばせてくれるものなのではないかと考えるようになった。

高知工科大学は全国的に見れば、はっきり言って弱いチームだ。だが、弱ければダメなのか。弱くても強いチームに勝つことはできる、そして人から評価されるチームになることはできると信じ、日々練習に打ち込んだ。応援されるチームになるのは、決して簡単なことではない。大会会場での態度、行動、チームを応援する姿、試合に望む姿勢、あらゆる点で一生懸命取り組むことができる必要がある。ただ漫然と部活動をしているだけでは絶対に掴み取ることはできないのだ。それは部活動だけに限ったことではなく、授業等の学生生活のも同じだ。尊敬されるとまではいかなくとも、応援されるためには一生懸命に授業に取り組む姿勢が重要だ。今、この状況で自分ができることはなんなのかを本気で考え、一生懸命に「応援される人間」という目的に向かって自分を表現してきた。

その目的を果たすことができたのかどうか、それは引退した今でも分からない。しかし、高知工科大学のソフトテニス部にはこんな特徴ができた。「どの大学よりも保護者が応援にきてくれる」ということだ。毎大会ごとに、保護者の方々がから差し入れを頂き、必死になって応援してくれる。これが一種の私が部活動をしてきた成果であると強く感じる事ができた。この目的を持って

いたからこそ、スポーツに勝つ以上のことを見出すことができた実感できた。

スポーツはある意味残酷だ。結果がわかりやすくそこに出てくる。私学の他の大学は有力選手を獲得し、全国の大会で活躍している。しかし、その選手たちと同じ立場として本学は出場しているのだ。同じ立場として立っている以上、その強い大学に勝つ、勝ちたいと思って部活に励んでほしい。それを目指す中で、キャプテンは、自分たちのチームがどういうチームになって欲しいのかを常に考えてほしい。それは結果目標ではない。人間として、チームとしてどうなりたいかということだ。人間として、チームとしてどうなりたいかは、追い求めても、追い求めても完全につかむことはできない。しかし、それを追い求めた先には新しい「何か」を見つけることができるはずである。その追い求めて見つけた「何か」が一番重要なのだ。それが例え「敗北」であっても、追い求めた先の「敗北」なら、その「敗北」には価値がある。それは本学が求める文武両道にも当てはまるはずだ。本学の掲げる文武両道は両方の成績を求めている一面はあるだろう。しかし、それをつかむために一生懸命にスポーツにも学業にも打ち込む姿勢が一番の文武両道の基盤になるはずだ。

ラグビー日本代表の監督をしていたエディー・ジョーンズはNHKの番組の中で「この世に完璧な指導者などいない。それを目指す道があるだけだ」と言っている。高知工科大学のキャプテンにはこの「道」を見つけ、歩いて行ってほしい。その中で、勝利を追い求め、多くのことから知識を得て道を開いて行ってほしい。道は視界が広がることで初めてはっきりと見ることができ。その意味で、本学の特徴であるマネジメントの講義は必ずその視界を広くするための材料となるだろう。

本研究が一人でも多くのキャプテンの胸の中に残り、自分が思う完璧の道を歩みだす第一歩となること、人間としてチームとしてどうなりたいかを考えること、そして本学のスポーツ学生が全国の舞台で活躍するための1ページになることを願っている。

## 謝辞

本研究を進めるにあたり担当教員である生島淳准教授をはじめ、ヒアリング調査を快く引き受けてくれた学生、高知丸の内高校教員の田中尚幸氏ほか、皆様から多大なご協力いただきまし

た。さらに研究活動の中で一緒に支え合った仲間、そして本学に入学させてくれた家族に向け、この場をかりて御礼申し上げます。

## 参考文献

- ・早稲田大学 競技スポーツセンター (2016) 『早稲田アスリートプログラム 大学でスポーツをすること』ブックウェイ。
- ・一般社団法人アリーナスports協議会監修 大学スポーツコンソーシアム KANSAI 編 (2018) 『大学スポーツの新展開 日本版 NCAA 創設と関西からの挑戦』晃洋書房。
- ・サム・ウォーカー 近藤隆文訳 (2018) 『常勝キャプテンの法則 スポーツに学ぶ最強リーダー』早川書房。
- ・友添秀則編著 (2016) 『運動部活動の理論と実践』大修館書店。
- ・友添秀則責任編集 清水論編集 (2017) 『現代スポーツ評論 大学スポーツの産業化』創文企画。
- ・高知工科大学マネジメント学部 錦内大智 (2015) 『スポーツにおける理想のリーダーシップならびにリーダー像の抽出』。

<http://www.kochi-tech.ac.jp/library/ron/pdf/2015/14/a1160456.pdf>

- ・高知工科大学マネジメント学部 濱崎羅奈 (2016) 『学生アスリートにおけるキャリア教育の一考察～高知工科大学のアスリート教育の在り方とは～』。

<http://www.kochi-tech.ac.jp/library/ron/pdf/2016/14/a1170463.pdf>

- ・広島大学大学院教育学研究科博士課程前期学習開発学専攻学習開発基礎専修 岩本寛司・児玉真樹子 (2017) 『部活動における主将のリーダーシップが部員の集団効力感に及ぼす影響』。

[https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/4/42645/20170324115728587693/JEducSci\\_10\\_117.pdf](https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/4/42645/20170324115728587693/JEducSci_10_117.pdf)

- ・河合塾の大学入試情報サイト Kei-Net

閲覧日：2019年1月8日(火)

[https://www.keinet.ne.jp/dnj/result/ao/18k\\_01.pdf](https://www.keinet.ne.jp/dnj/result/ao/18k_01.pdf)

- ・立教大学大学院現代心理学研究科 齋藤正樹 (2014) 『目標設定が研究活動への時間配分の自己管理に与える効果』。

AA11430459\_56\_04.pdf

- ・早稲田スポーツ新聞会

<http://wasedasports.com>

- ・明大スポーツ新聞部「明スポ」

<https://meisupo.net>

- ・同志社スポーツアトム編集部

<http://doshisha-atom.net>